

# 詩「春の歌」

愛知川町立愛知川東小学校

## 上野学級の実践



上野芳樹先生

### 学級指導案

一九八九年五月十二日  
四年一組 指導者 上野芳樹

#### 一、題材 詩「春の歌」 (草野心平)

#### 二、指導によせて

##### (一)この授業での課題

① この詩を外から分析的、説明的に読むのではなく

子どもたち自信が蛙になってここに描かれている世界を実感していくような読みにしたい。

② 子どもが読み味わうような授業の展開にしたい。教師の発問で展開させるのではなく、あくまで子どもが、この詩から読み描いているものから出発して、それをより鮮明で具体的なものにしていく、また一人の読みをみんなに広げるために教師が援助の手を入れていくという姿勢を大事にしたい。

③ 一人ひとりが自分の考えを持ち、それを出し合いみんなで追及しあう、そういう中で自分をありのまま表現する力を育て、友達の個性的な考えに学ぶ力を育て、みんなで追及することの良さを学ばせたい。

##### (二)授業展開の構想

(詩は全文板書しておく)

① 前文を読み、冬眠からさめた蛙の詩であることを知らせる。

② 各自で自由に声を出して読ませる。  
○さまざまな疑問や感想のつぶやきがあれば、板書で書き留めておいたり、みんなにひろめる。  
○読みの力の弱い子の読み下しにくいところはどこかをさぐる。

③ 「みんなは、この詩を読んでどんな感じがしたか。」  
全体の印象を聞く  
○とても楽しい感じがする。

○ケルンクックと言葉がおもしろい。  
○ほっがいっぱい出てくるからおもしろい。  
○何だかまだ、あまりよくわからない。(どんなところがよくわからない?)

④ どんな蛙の姿がうかんできるか出しあう。  
少し時間をとってひとり読み。線を引かせたり書きこみさせて、自分の読みをつくらせる。  
○「ほっまぶしいな」てびっくりしてるん。初めて外へ出てきたで。(そのところ、ぼくもよく似たこと考えた、という人ある?)

今まで真暗のところにいたでや。(その時、びっくりしていやな顔になってる?)

○「うれしいな」ていうのも、今まで地面の中でがまんしてたで。外へ出たら自由に動き回れるで、やっとうられたな、て「ほっ」としてるん。

○「水はつるつる」て光ってるのとちがうかな。  
「つるつる」てすべるみたいに流れているの。  
水にさわって、つるつると水がくすぐるみたいで気持ちよいのかもしれない。

○「ああいいにおいだ」てここにこして言っている。しんこぎゅうしていぬのふぐりのにおいがしている。もっといろんなものにおいもしているんちがう。さくらとか、たんぼぼとか。(今まで土の中にいた時は、どんなにおいだっただらうね。)

※その他、子どもたちのイメージをふくらませる問いとして用意しておくもの  
○この蛙はじっとして言っているのか、動きながら言っているのか。

○「ほっ」が四つあるが、どれも同じだらうか。ちがうだらうか。どうちがうだらう。  
○それぞれの「ケルンクック」を人間の言葉に直したら。  
⑤ 蛙になって朗読してみよう。(その感想を書く。)

草野心平

春の歌

ほっ、まぶしいな。  
 ほっ うれしいな。  
 みずはつるつる  
 かぜはそよそよ。  
 ケルルン クック。  
 ああいいにおいだ。  
 ケルルン クック。  
 ほっ いぬのふぐりがさいている  
 ほっ おおきなくもがうごいてくる  
 ケルルン クック。  
 ケルルン クック。



C めいめいで読む。

T じゃ、この詩を読んでどんな感じがしましたか。

公美 ケルルンクックのクックでかえるがわらっている。

朝子 くーちゃんのいわったケルルンクックという笑いは、

一つにまとまってるんと、ところどころにあるから、う

れしさがときどきばばつと出てくるような感じ。

大裕 はい、ぼくわかった。あんな、時々きえたりするさ

かい。

なつ希 ほっ、いぬのふぐりがさいている、のところで、

なんか、かえるがびっくりしてるような感じがする。

優子 ほっ、のところで、とんでるような感じがする。

大裕 水はつるつるとか、ようじろじろ見ながら言うてる。

……そよそよとかも……うん、もっとあるよ。く

もがうごいてくるとか。

政義 冬の間な、そんなくもとか水たまりとか、いっこも

みてへんさかい。冬やったでな、土の下で生活してや

ったんやで、空とか水たまりとか、いっこも見てへん。

だから、じっと見ている。

C (口々に語り出す)めずらしい、なつかしい。

西津 もう冬がすぎて、久しぶり。地上に出るのが。

T ずうっと地面の中にいて、久しぶりに出てきた。だ

なつ希 空気が変わったみたい。

直也 うれしいなあって。

——ここで、朗読と各自の読みを入れる——

政義 土の中やったら花とか見られんかったけど、地上に

出てきたら、花とか見られるでびっくり……。

智将 ケルルンクックのクックは何かうれしそうな感じ。

勝仁 ケルルンクックはな、かえるがゲコゲコ鳴いとる。

明代 ああいいにおいだ、の後にケルルンクック書いて

あるから、いいにおいがしたらうれいから。

大裕 うれしいさかいにケルルンクックていわるん。

朝子 ほっ、まぶしいなとか書いたから、今初めて地上

に出ってきた一番初めの時だから、びっくりしたりうれ

しかったりしてるんやと思う。

優子 ほっ、まぶしいな、のところで、冬の時は暗い土の

中ですごしてたけど、急に外に出て明るかったから、

ほっ、まぶしいなって。

T いま、この「ほっ、まぶしいな」で言った時、かえ

るはどこにいますか。

C 外！地面。

由美子 頭をちょこっと出している。

直也 先生、ぼくちがうと思う。ぼく見たんやけどな、畑

に冬眠しとるかえるがおってな、上にちよっとだけ土

がのせたったさかいな、ほこから見とった。

から、めずらしいし、……

直也 あんな。前は陸で生活してやってな、冬にだんだん

寒くなってきたさかいな、土の中にもぐってな、生活

してやってな、また春がきたで出てきたらな、なつか

しい。どこも何もおんなじやったん。前と。

朝子 土の中は暗いのに、お日さまが光っててすごく明る

いとところで、ほっ、ていうのがほんとにびっくりした

り、じっとみてるというのの思い出しながら、あっこ

んなことがあったんやな、というような。

智将 前から地上にいたんやったら、ほっ、とは言わない

けど、出てきたばっかりだから、まぶしかったり、水

T じゃ、そういうことを頭において、もう一ぺん自分

で読んで下さい。ここからはどんなかえるがうかん

でくるか、もっとくわしくかべてみましょう。……読む

政義 ああ、いいにおい、ていうところだな、土の中では

そんないいにおいしなかったでな、ほんでびっくりし

てな、こんないいにおいがしてたんかって知らんてや

ったん。

邦臣 うんわかった。土の中やったらいいにおいがとどい

てないのに、地上に出たらにおいがぶんぶんする。

勝仁 何のにおいかいいたい。あんな、花のにおい。

宣彦 春のにおい。

直也 「手ぶくろを買いに」みたいに、どうくつから暗いさかいな、行ったら雪がきててな、反射してピカッと光って、ワァッてなったみたいに。

朝子 えっと、出てたらふつうの「ああまぶしいな」という感じだと思っけど、頭を出したらキラッときたから「ほっ、まぶしいな」で感じるんやと思う。

優子 「ほっ」のところで、やっと暗いところじゃなくて明るいところへ出られたから、ほっと安心してる感じ。

直也 その時ほっててな、やっと出られた。

邦臣 やれやれ、と思った瞬間にまぶしさが目に入った。

政義 光を見て、もう春がきたんだな、て思った。

哲也 何か気持ちがいい。太陽がまぶしいけど気持ちがいい。さわやかな感じ。

T じゃ、もう一つ聞きたい。この次にも「ほっ」が出てきますね。「ほっ」の気持ちはいっしょでしょうから。

由美子 最初の「ほっ」は、パッと出た時、お日様がきらつと光ってびびくりしたんだけど、次の「ほっ」は、

少しなれたから、ほっ、て安心している。

政義 初めの「ほっ、まぶしいな」は、春がきて、二番目の方は、なんかよけいびびくりしている。

T この「ほっ、うれしいな」は、やっぱりじっとして言っているんだろか？

直也 後のほっ、でうごいてる。

たような感じがした。地上に出てきたかえるが、春を見て思っているみたい。土の中は、まっ暗で何も無い。そして、地上に出てきて、土の中とはちがうものをたくさん見ておどろいてるみたい。今まで土の中のおいをかいていたけど、外に出て春の空気をすいこんで、（ああ、なんていいにおいだろ）とさわやかな気分になっているみたい。朗読で、みんなが読んだ。全員、かえるになりきっている感じがした。

### 前田朝子

私は、この詩を読む前に、（いっばい意見の出そうなお話やな）と思ってたら、そのとおりになりました。

私は、最後に読んで、

「いろいろどくやなあ。」

と先生が言ってくれたのでうれしかったし、国寄祐子ちゃんのろうどくも、よかったと思う。

「ほっ、いぬのふぐりがさいている」

のとこで、みんなの場合、いっばい咲いているように読んだけど、祐子ちゃんは、たった一つだけ咲いているような感じで「ほっ」と言ったから、私は、とてもいいなと思った。……今度読む時は、そういうことに気をつけて、ゆっくり読もうと思いました。

T じゃ、どこでうれしさを感じているのでしょうか。線でむすぶとしたら。

和樹 ああいいにおいだ、のとこ。

邦臣 大きなくもが動いている。

龍法 水はつるつる 風はそよそよ。

T どういうものをみてつるつるって言うてるのかな。

宣彦 太陽が水たまりに当って鏡のように反射している。

勝仁 あんな、水をさわってみたら、つるつるしてた。

優子 草にしがすがついていてつるつると落ちてる感じ。

朝子 水は、ていうたって水たまりとはかぎらへん。雨みたいなあとの水の玉が重くなって、ピチャンと落ちて

はっぱがはねるみたい。

直也 はっぱから水玉がおちてきて、それが、かえるにピチャンと当たった。

T なるほど、おもしろいね。先生は、小川がサラサラ流れていくのを見て、ああ水が流れる流れていくなあってそんなふうに思っ浮べてたんだけどね。

（もっと詳細な授業記録でしたが、かなり省略させて頂きました。編集者）

### 感想文から

国寄祐子

私は、「春の歌」という詩を読んで思った。初め、これは草野さんが書いた詩じゃなくて、かえるが書いて



4年1組の仲間たち